

食事動作から食事マナーを考える 「嫌い箸」を例として

著者	廣瀬 直哉
雑誌名	京都ノートルダム女子大学研究紀要
号	49
ページ	15-28
発行年	2019-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1057/00000293/

食事動作から食事マナーを考える —「嫌い箸」を例として—

Reconsidering Table Manners from the Viewpoint of Eating Motions:
An Example from “*Kiraibashi*”

廣 瀬 直 哉
HIROSE Naoya

Most studies on manners prioritize the observance of traditional rules, but some researchers insist that table manner is an issue of beauty rather than the judgment of good or evil. This study aimed to investigate Japanese table manners in terms of the exquisiteness of eating motions. We explored “*kiraibashi*” —bad manners using chopsticks— by evaluating fluencies of eating motions during a meal. Examples of *kiraibashi* were examined and classified into five eating scenes: lifting chopsticks, picking with chopsticks, putting into the mouth, laying down chopsticks, and others. These analyses suggest that most instances of *kiraibashi* are related to the errors or disfluencies of motion. Findings are discussed in relation to different meal settings and cultural aspects of manners.

1. はじめに

昭和～平成において日本人の食生活は大きく変わった。こうした変化の中で、伝統的な食事マナーが乱れてきていることが種々の調査から指摘されている^{1,2)}。こうした伝統的なマナーの変化を嘆く人がいる一方、マナーの乱れに寛容な人もいる。特に、若者はマナーなど気にしなくてもよいと考えるものも少なくない^{3,4)}。社会や食生活が変化している以上、社会において守ることが期待される食事マナーも当然変化するだろう。平成の次の新しい時代を迎えるにあたって、伝統的なマナーの継承という観点ではなく、新しい時代にふさわしい食事マナーを考える必要があると思われる。

食事マナーとは何だろうか。井上は、作法とは人間の社会生活において、互いに守ることが期待されている言語や動作の決まりであると述べている⁵⁾。食事を楽しく進行させるためには、食事を共にする者同士の相互干渉を調節するルールが必要であり、これを儀礼化したものが食事マナーである⁶⁾。石毛は、他人の目を意識しながら食べることが食事作法の根源にあると述べている⁷⁾。つまり、他者の存在が行儀作法の必要性を生じさせており、周りに人がいなければマナーを気にする必要はない。

食事マナーは他者との関係に由来するので、食事マナーの問題は社会や文化の問題として捉えられる場合が多い。黒須は、食行動に関わる様々な学問領域を整理している中で、規範、作法、禁忌に関わる領域として、社会学と社会人類学を、また、文化的変異や歴史的变化に関わる領域として、文化人類学や民俗学、歴史学などを挙げている⁸⁾。一方で、食行動は食卓という複雑な環境で行われる日常行為である。私たちは、毎日、様々な場所で様々な料理を食べている。たとえ、同じ場所で同じ料理を食べる場合であっても、全く同じ具材や量で、食卓上の配置も全く同じということはない。そうした多様な環境で行われる行為は、毎回異なっているだろう。食事マナーについて考える際に、そうした行為の詳細についても考える必要があるのではないだろうか。黒須は、食行動に関わる学問領域として、食行動の有効さや効率を扱う人間工学、知覚や感性を捉える感性工学・心理学なども挙げている⁸⁾。本稿は、食事マナーを食事行為の詳細に焦点を当て、心理学や人間工学的な側面から考えるものといえる。

2. 食事マナーに対する考え方

これまで行われてきた食事マナーに関する調査研究では、伝統的な食事マナーを基準として、食事マナーの実態や意識をアンケート調査したものが多い。例えば、奥田は、食事中マナー違反とされるふるまいを注意されたことがあるかを尋ねた結果、「ひじについて食べない」「食べ残さない」「口に入れたまましゃべらない」「箸を正しくもつ」などのふるまいを注意された割合が多いことを見出した⁴⁾。また、安田らは、マナーを家庭教育の問題と捉えて女子大生親子世代間のマナー意識を調査した結果、親世代のほうが子世代より全体的にマナーが良いこと、マナーの意識より行動において、より世代間の差がみられたことを報告した²⁾。

こうした伝統的な食事マナーが守られなくなってきている実態を報告している研究の前提とされているのは、古い時代の慣例はそれだけで守る価値があるという考え方である⁹⁾。食事マナーの問題は、伝統的なマナーを遵守しているかどうかの観点から取り上げられることが多いと思われる。しかし、そもそもマナーとは、これまでのマナーが守られていれば良く、守られていなければ悪い、という善悪の問題ではないという考え方もある。例えば、井上は作法の基準は善悪ではなく美醜の問題であり、道徳ではなく美意識の問題であるという立場を取る⁵⁾。また、村上はマナーは正解が1つの「正しい」というものではないことを指摘し、食事マナーについては恥から美への転換が必要であり、伝統的な作法とは別の「所作の美しさの追求」という新しい食事マナーの可能性について言及している¹⁰⁾。同様に、石毛は、いかに優雅に口に食物を運ぶかが食事作法における要点であると述べている⁷⁾。

このようにみていくと、新しい時代のマナーを考えるには、必ずしも伝統的なマナーにこだわる必要はなく、所作の美しさや食物を口に運ぶ優雅さなどの観点から考えるのが望ましいのではないだろうか。所作の美しさや優雅さは、食事中実際に行われる動作のスムーズさに関連していると思われる。こうしたことから、本稿においては、食事マナーを考える際に、実際の

食事動作に注目し、特に行為の流暢性（動作がスムーズに行われるかどうか）の観点から検討を行う。

3. 嫌い箸

（1）嫌い箸とは

食行動および食事マナーは、食文化や食事の種類により大きく異なる。具体的な食事動作について検討を行うためには、扱う対象を限定する必要がある。そこで、本稿では日本において箸を使う際の食事マナーである「嫌い箸」を取り上げる。

箸を使う食事方法は箸食と呼ばれる。食物を口に運ぶ食事方法は手食、箸食、ナイフ・フォーク・スプーン食の3つの基本型に分けられ、このうち箸食は、日本・中国・韓国など東アジアが中心で、全体の約3割である¹¹⁾。箸は中国で生まれ、日本には三世紀頃に伝わったとされる。最初は神事で使われていたが、奈良期に貴族が箸と匙を食事を使うようになった。その後、次第に一般庶民にも箸の使用が広まり、鎌倉期にはほぼ箸だけを使うようになった¹²⁾。箸食の文化圏においては箸以外の食具も通常用いられ、中国では汁類には匙、韓国ではご飯に匙を使用する。ほぼすべての料理において箸のみを使うのは日本だけである。

日本の食事作法は「箸に始まり箸に終わる」とよく言われる。日本料理の食事作法は鎌倉期にはじまり、公家や武士の間で発達した礼儀作法が基本になっている⁶⁾。そうした中で、他の人に不快や不浄感を与えるような箸使いは嫌い箸（忌み箸）と呼ばれ、無作法な行為とされている。嫌い箸に関する古い文献をひもとくと、江戸期の食事作法を記した「食物服用之巻」には、「まどひばし」「たてばし」など9種類の嫌い箸（「きらいはしの事」）が記されている¹³⁾。また、明治には、東京府布達「小学女礼式」の中で、「箸なまり」「移り箸」など9種類の嫌い箸が記載されている⁶⁾。最近では、学校給食の指導の中でも、「やめたいはしの使い方」として5つの嫌い箸（「迷い箸」「涙箸」「刺し箸」「持ち箸」「寄せ箸」）が取り上げられている¹⁴⁾。このように嫌い箸は、日本においては古くから現代までよく知られたマナーであるといえる。

日本以外の国にも箸に関するマナーはある。中国では、紀元前から有識階級では箸に関するマナーがあったと言われている¹⁵⁾。しかし、日本のように箸に特化した形のマナーがある国や地域は他にない。では、なぜ日本では嫌い箸が生まれたのだろうか。その理由として、箸のみを使って食事を行うのは日本だけである、という事情が関連しているのは明らかであろう。金は、箸のみを使用することによって、日本独特の食事作法が誕生したと述べている¹⁶⁾。また、山口は、日本は食具が箸に特化したために、箸運びに神経が集中して箸の上げ下ろしが問題になり、マナーとしての嫌い箸が生まれたと述べている¹⁷⁾。嫌い箸は、箸のみを使用する日本独特の食事法から生まれた日本固有の食事マナーであるといえる。

(2) 嫌い箸に関するこれまでの調査

本節では、具体的な検討を進める前に、嫌い箸についてのこれまでの調査研究を概括しておく。

食事は、昭和以前においては厳しいしつけの場であった。大正生まれの女性の食卓生活史の聞き取り調査によると、「ねぶりばし」「さしばし」などの嫌い箸は注意され、箸の上げ下ろしについては厳しくしつけられていたようである¹⁸⁾。昭和～平成になって食事に変化し、厳しいしつけはあまり見られなくなってきた。また、食事の中での箸の使用も変化している。小学生を対象とした勝田の研究（平成9年実施）によると、食具の中で箸が使いやすいと答える児童は半数以下であり、昭和50年の研究と比較するとその割合は約半分になっていた¹⁹⁾。このことを踏まえると、現在の児童における箸の使用しやすさは、さらに減少しているであろう。そうした変化の中で、近年の研究においては、嫌い箸を知っているか（認知）、嫌い箸をすることがあるか（行動）、他人の嫌い箸に不快感をいだくか（感情）の観点から意識調査が行われている。

嫌い箸を知っているか、教えられたか（認知）に関する研究としては、以下のものがある。田島らの研究では、小学生、大学生、中高年に16種類の嫌い箸を教えられた割合を尋ねた結果、拾い箸、迷い箸、くわえ箸などの割合が高く、渡し箸、涙箸、込み箸などの割合が低いことがわかった²⁰⁾。また、加藤らの研究では、女子大生に9種類の嫌い箸の認知度を尋ねたところ、迷い箸、刺し箸、探り箸、移し箸、寄せ箸が高く、涙箸、しごき箸が低いことがわかった²¹⁾。さらに、勝田の研究では、児童の保護者に12種類の嫌い箸の認知度を尋ね、くわえ箸、なめ箸、探り箸などがよく知られていることがわかった²²⁾。これらの研究をまとめると、認知度が高いのはくわえ箸や迷い箸で、認知度が低いのは涙箸や込み箸であるといえる。

次に、嫌い箸をすることがあるか、またはして注意されたことがあるか（行動）と他人が行う行動に不快感をいだくか（感情）に関する研究としては以下のものがある。岡田の研究では、女子短大生に食事を含むマナーについて尋ねた結果、指し箸や振り箸などを行うことがある者が約3割、迷い箸や探り箸などを行うことがある者が約2割いることがわかった³⁾。また、勝田の研究では、小学生に注意をうける嫌い箸を尋ねた結果、多い順に、拾い箸、くわえ箸、叩き箸、かみ箸・ねぶり箸などであった¹²⁾。次に、荒井らの研究では、女子大学生の半数以上が箸の使い方についてなんらかの注意を受けてきており、多い順に、渡し箸、叩き箸、寄せ箸、刺し箸などであった²³⁾。また、他者の箸使いに対して、直箸やねぶり箸などが気になると回答した。さらに、短大生を対象とした細川らの研究においても、食事マナーについての調査の中で嫌い箸に相当する6つの行動について、自分の行動と他人の行動への意識（感情）を尋ねた²⁴⁾。その結果、自分の行動では、渡し箸と重ね箸を半数以上が行うと回答しており、他人の行動では、拾い箸と寄せ箸が気になるとする割合が90%以上であった。これらの研究をまとめると、渡し箸や叩き箸をして注意されることが多く、他人の箸使いでは直箸、拾い箸、寄せ箸を不快に感じるといえる。

行動・認知・感情のすべての観点を取り上げたものとしては、内閣府食育推進室の調査がある²⁵⁾。この調査では、7つの嫌い箸に対する不快感（感情）、嫌い箸の箸使いをするか（行動）、マナー違反であると知らなかったものはどれか（認知）をそれぞれ尋ねた。その結果、寄せ箸と拾い箸はほとんどが知っており（95%以上）、他人が行うと不快感が高く（90%以上）、自分ですることは少なかった（10%以下）。一方、渡し箸は知らない割合が1/4もあり、不快感を持つ者は半分以下で、約半数が自分でもすることがあると回答していた。このように、マナー違反であると認知している嫌い箸については、自分で行うことは少なく、他者が行うと不快感になる。逆にマナー違反であると思わない嫌い箸については、自分で行うこともあり、他者が行っても不快には感じにくいといえる。

（3）本研究で検討対象とする嫌い箸

本田によると嫌い箸は約70種類あるという²⁶⁾。また、和食のマナーについての書籍やWebなどをみると、様々な嫌い箸が紹介されているが、必ずしも体系的にまとめられているわけではない。そこで、本研究では検討対象とする嫌い箸の種類を限定し、ほとんど知られていないようなものを除いて、ある程度知られた嫌い箸に焦点を当てることにした。

まず、嫌い箸について幾分まとまった記載のある7つの文献を選んだ^{6, 8, 20, 21, 26-28)}。この7つの文献から抽出したところ、のべ169の嫌い箸があった。そこから、細かな名称表記の違いなどを統一し、3つ以上の文献に記載されている嫌い箸を選んだところ30あった（表1）。名称によっては、内容が異なる別定義もあるが、その場合は主に使われている定義を使うことにした。これら30種類の嫌い箸を検討対象にすることにした。

4. 食事行為の分析

（1）系列的行為の研究

2章で述べたように、本稿では所作の美しさや優雅さの観点からマナーを考えるため、実際に行われる食事動作に注目して、行為の流暢性についての検討を行う。そのために、本節では、これまでの系列的行為についての研究をもとに、行為の流暢・非流暢を捉える方法について簡単に述べておく^{29, 30)}。

食事行為は、一連の動作からなる系列的行為とみなすことができる。一連の動作から系列的行為を記述し、更にその動作の系列から行為の非流暢を見出すには以下のような手続きをとる³⁰⁾。

1. 基本的な動作単位の設定

まず初めに、予備的観察などにより、系列的行為を構成する基本的な動作単位を設定する。

表1 本研究で検討対象とする嫌い箸

名称	定 義	動作場面
握り箸	箸をにぎりしめて持つ	箸を持つ
直箸	取り箸を使わずに、自分の箸で大皿の料理を取り分ける	箸を持つ
こじ箸	料理を上から食べずに底のものをこじ起こして食べる	箸をつける
探り箸	食器の汁物などをかき混ぜて中身を探る	箸をつける
すかし箸	魚の上身を食べたあと、中骨をはずさずに骨越しに下身を食べる	箸をつける
刺し箸	料理を突き刺して食べる	箸をつける
横箸	二本の箸を揃えて、スプーンのようにして料理をすくい上げる	箸をつける
空箸	料理に一旦箸をつけておきながら、食べずに箸を置く	箸をつける
移り箸	ある料理をいったん取りかけてから他の料理に箸を移す；(別) おかずを食べてから、またすぐに次のおかずの箸を動かす	箸をつける
迷い箸	どの料理を食べようかと迷い、料理の上であちこちと箸を動かす	箸をつける
二人箸	食器の上で二人一緒に料理をはさみ合う	箸をつける
拾い箸	料理を箸から箸に渡す	箸をつける
涙箸	箸先から汁などをたらす	口に入れる
かき箸	食器のふちに口を当て、料理を箸で口の中にかき込む；(別) 箸を使って頭などを掻く	口に入れる
込み箸	口にはおぼったものを箸で奥へ押し込む	口に入れる
渡し箸	食事途中で箸を食器の上に渡して置く	箸を置く
立て箸	ご飯の上に箸を突き刺して立てる	箸を置く
くわえ箸	箸を口にくわえたまま、手で食器を持つ	箸を置く
持ち箸	箸を持ったまま、他の食器を持つ	箸を置く
受け箸	箸を持ったままお替りを受ける	箸を置く
もぎ箸	箸先に付いたご飯などを口でもぎ取る；(別) 口の中のものを箸先でもぎ取る	その他
ねぶり箸	箸をなめる	その他
かみ箸	箸先をかむ	その他
振り箸	箸先についた汁などを振り落とす	その他
洗い箸	茶碗などの中で箸を洗う	その他
落とし箸	食事中に箸を床に落とす	その他
寄せ箸	食器を箸で手前に引き寄せる	その他
指し箸	食事の中に箸で人を指すこと	その他
叩き箸	箸で食器などを叩いて音を出す	その他
せせり箸	箸を楊枝代わりにして歯をせせる；(別) いろいろな料理をほじくり返して食べる	その他

2. 動作系列のコード化

実際の行為を詳細に観察し、1で設定した基本的な動作単位で行動をコード化していく。

3. 典型的な動作系列の抽出

動作系列の中には、通常このように進むという典型的な系列と、そこから逸脱した系列がある。行為全体をコード化した後、遷移分析などを用いて典型的な動作系列を抽出する。

4. 動作系列における逸脱（非流暢）の特定

典型的な動作系列と比較して、逸脱している部分を特定する。

例として、スプーンを使って、砂糖をカップに入れるという単純な行為を考えてみる。この場合、基本的な動作は、スプーンをとる（take spoon）、砂糖をすくう（scoop sugar）、砂糖を入れる（pour sugar）、スプーンをおく（give spoon）の4つであり、典型的には、“take spoon > scoop sugar > pour sugar > give spoon”という系列で進む。ところが、砂糖でなく、塩をすくってしまった場合は、“take spoon > scoop salt > …”となり、典型からの逸脱が生じる（逸脱部分を下線で示す）。このような逸脱をアクションスリップと呼ぶ。

また、アクションスリップのような完全な逸脱ではなく、不完全な逸脱が生じることがある。例えば、間違っってフォークをとろうとしたが、動作途中で軌道を変更し、スプーンをとったような場合で、“taking fork, take spoon > …”となる（途中の動作はingで表す）。このような不完全な逸脱をマイクロスリップと呼ぶ。アクションスリップに比べ、マイクロスリップは日常行為の中でかなり頻繁に生じる^{31, 32)}。

行為途中にアクションスリップやマイクロスリップのような逸脱が生じることにより、行為はスムーズに繋がらなくなり、非流暢になる。このように、動作系列をコード化し、アクションスリップやマイクロスリップの生起を同定することによって、行為の流暢性（動作がスムーズにつながっているかどうか）を評価することができる。

(2) 箸を用いた食事の動作系列

前節で述べた系列動作の研究を嫌い箸の検討に適用するため、本節では箸を使って食べるときの動作系列を考える。弁当を食べる行為を詳細に観察した研究^{29, 33)}から、以下のような基本的な動作およびその系列が示唆される（図1）。

食事動作の要点は、食卓に置かれた食物をつかんで（c）、それを口に入れる（d）ことの繰り返しである。ただ食物が大きいなどの理由で直接つかんで口にすることができない場合、食物を切って小さくして（b）から、食べることもある。また、食事行為の観察から、食物を口に入れた後には、一時的な休止（e）を頻繁に行うことがわかっている。したがって、食事の中では、“[b] → c → d → [e]”という一連の動作系列が繰り返されることになる（b, eは省略されることもあるため括弧付きにしている）。箸を使って行う食事の場合は、この前後に箸を取る（a）、箸を置く（f）の動作が付け加わる。食事の途中で一旦箸を置くこともあるので、この“a → …

-
- a. 箸を取る (take chopsticks)
 - b. 食物を変形する (alter food)
 - c. 食物をつかむ (take food)
 - d. 食物を口に入れる (put food)
 - e. 休止 (pause)
 - f. 箸を置く (give chopsticks)
-

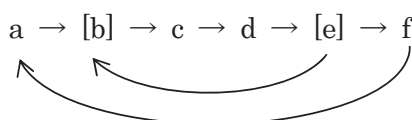


図1 箸を使って食するときの基本動作の流れ (b, e は省略されることもある)

→ f' までの動作系列が何度か繰り返される場合もある。

以上のことを踏まえ、嫌い箸を動作にもとづき検討するにあたって、箸を取る (a)、食物をつかむ (c)、食物を口に入れる (d)、箸を置く (f) の4つを基本動作として取り上げる。食物を変形する (b) については、食物をつかむ (c) の前動作で省略されることもあることから、同じ動作場面として扱う。また、休止 (e) は具体的な動作ではなく (非動作)、省略されることもあるので本研究では扱わない。

5. 嫌い箸の動作に基づく検討

前章では、箸を使った食事の際の4つの基本動作を示した。これらはあくまで基本的な動作であり、実際の食事においてはそれ以外の動作も行われる。したがって、本章での検討においては「その他」も加え、以下に述べるように、5つの動作場面 (箸を持つとき、食物に箸をつけるとき、食物を口に入れるとき、箸を置くとき、その他の動作のとき) に分けて、嫌い箸を動作の観点から検討した。なお、本研究と類似した観点による分類として、本田は、箸を持つためのタブー、箸をつけるときのタブーⅠ・Ⅱ、食物を口にのけるときのタブー、箸休めやお替りのときのタブー、その他のタブー、として嫌い箸を分類している²⁶⁾。

(1) 箸を持つときの嫌い箸

「握り箸」は、箸を握りしめて持つ嫌い箸であり、正しい道具の使用法から逸脱した動作といえる。幼児は、2歳頃にはわしづかみで箸を持つが、3歳半頃になると箸を使って食事ができるようになる³⁴⁾。しかし、正しい箸使いをするのは難しく、児童を対象に行われた研究でも、箸に関して受ける注意で最も多いものは箸の持ち方である¹⁹⁾。箸の持ち方については多くの研究

が行われているが³⁵⁻³⁸⁾、箸の持ち方は、箸の使い方とは別に扱われることもあり、嫌い箸に含めないことも多い。

「直箸」は、取り箸を使わずに自分の箸で大皿の料理を取ることであり、適切な道具を選択しない逸脱と考えられる。取り箸がない場合は箸を逆にしてはさむこともあるが、これも逆さ箸と呼ばれマナー違反とされることがある。直箸は文化による差があり、通常取り箸を使わない中国や韓国においてはマナー違反ではないとされる。

(2) 食物に箸をつけるときの嫌い箸

1) 食物との接触方法に関する嫌い箸

箸で食物をつかむときは、食物に真っ直ぐ到達して把持することが望ましいが、こうした直接的な食物との接触から逸脱した動作の嫌い箸がある。「こじ箸」は器の下にあるものをこじ起こして食べる場合、「探り箸」は汁物をかき混ぜて中身を探る場合、「すかし箸」は魚の中骨を外さずに骨越しに食べる場合の嫌い箸であり、いずれも食物と直接的な接触ではないので、好ましくないと考えられる。

加えて、箸をつけるときの基本の動作ははさむという動作であるが、他の動作により食物を取る嫌い箸がある。「刺し箸」は突き刺して、「横箸」は横からすくって、食物を口に運ぶ場合の嫌い箸である。いずれも、はさむという動作ではなく、刺したり、すくったりする別の動作を行うので、動作の転換（同じ動作カテゴリに属するが、異なる動作方法で実現すること）が生じている。

2) 動作推移の嫌い箸

前章で動作系列の逸脱としてマイクロスリップについて述べたが、このマイクロスリップに該当する動作の推移に関する嫌い箸がある。「空箸」は一旦箸をつけておきながら食べない場合であり、接触 (touches and take/gives) のマイクロスリップにあたる（例えば、taking pickles, pause）。「移り箸」はある料理から別の料理に箸を移す場合であり、軌道の変更 (trajectory changes) のマイクロスリップにあたる（例えば、taking kamaboko, take tempura）。また、「迷い箸」はなまじ箸、箸なまりとも呼ばれ、どの料理を食べようかと料理の上であれこれと箸を動かす場合であり、これは複数の軌道の変更（彷徨 wandering）のマイクロスリップにあたる（例えば、taking rice, taking sashimi, taking …）。いずれの嫌い箸もマイクロスリップを含んでおり、行為の非流暢が生じている。

3) 他者の介在により生じる嫌い箸

元来、ヒトの食事は狩猟採集により得た食料を共に分かちという共食であった。現代では一人で食事をすることもあるが、他者と一緒に食べることも多く、他者の影響で生じる嫌い箸がある。「二人箸」は二人で同じ料理をはさむ嫌い箸である。これは偶然の非意図的な動作であり、

他者との相互作用の問題であるといえる。この嫌い箸は、日本の伝統的な、各人ごとの膳に配る銘々膳では起こらない。

「拾い箸」は合わせ箸や箸渡しとも呼ばれ、箸から箸に料理を渡す嫌い箸である。火葬の際に、遺骨を箸から箸へ渡す慣わしがあるので、忌み嫌われる。しかし文化的な側面が強く、日本以外の国では必ずしもマナー違反ではない。また、この嫌い箸は、二人による食物の受け渡しであるので、一方にとっては食物をつかむ (take food) 動作場面であるが、他方にとっては食物を放す (give food) 動作場面になる。

(3) 食物を口に入れるときの嫌い箸

「涙箸」は口まで運ぶ途中で汁などをたらす嫌い箸である。この嫌い箸は意図的な動作ではなく、非意図的な動作の結果である。涙箸を避けるには、器の中で汁をよく切ってから口に運ぶ必要がある。日本以外の箸食文化圏では汁物の場合は匙を使うことが多いため起こりにくい。

前章で述べたように、食事動作の基本は、食卓に置かれた食物をつかむ、それを口に入れるという2つの基本動作の繰り返しであり、このことがスムーズに行われることが美的な観点からは大切である。「かき箸」は器を口にあて料理をかき込む嫌い箸であり、つかむ→口に入れるという基本の2つの動作をかき込むという1つの動作で行っている。また、食物をはさまず、二本の箸を一本のヘラのように用いている点で望ましくないと考えられる。「込み箸」はほおばった食物を箸で押し込む嫌い箸であり、これも基本の2動作ではなく、さらに追加の押し込むという動作をする点で好ましくないとされる。

(4) 箸を置くときの嫌い箸

1) 箸置き以外に置く嫌い箸

箸は使わないときは箸置きに置くのがマナーとされる。「渡し箸」は箸を器の上に渡して置く嫌い箸である。これは食べ終わったことを示す置き方であるため、食事途中では行うべきではない。また「三途の川を渡す」という意味で縁起が悪いとされることもある。しかしながら、現在では箸置きが食卓にないことも多く、3章でみたようにマナー違反とは思わない人も少なくない。一方、「立て箸」は仏箸とも呼ばれ、葬儀の際に死者に供える枕飯には箸を突き立てる習慣があるために、縁起が悪いとされる。いずれも、社会文化的な要因から好ましくないとされる嫌い箸である。

2) 箸を置かないことで生じる嫌い箸

使わない時に箸を置かないことで嫌い箸とされるものがある。「くわえ箸」は箸を口にくわえたまま、「持ち箸」は箸を持ったまま、器を手で扱う嫌い箸である。また、「受け箸」は箸を持ったままお替りを受ける場合である。いずれにおいても、箸を置くという動作を省略しており、動作分析においては、省略エラー (omission errors) に相当するものである。

(5) その他の動作のときの嫌い箸

最後に、これまで見てきた (1) ～ (4) の主要な動作場面以外で生じる嫌い箸について述べる。

1) 箸に対する適切でない動作の嫌い箸

箸自体に対して何らかの余計な適切でない動作を行う嫌い箸がある。「もぎ箸」は箸についたものを口でもぎ取る嫌い箸である。これを避けるために事前に箸先を湿らせたりする。「ねぶり箸」はなめ箸とも呼ばれ、箸をなめる場合、「かみ箸」は箸を噛む場合の嫌い箸である。また、「振り箸」は箸先についたものを振り落とす場合、「洗い箸」は茶碗などで箸を洗う場合の嫌い箸である。これらはいずれも箸に対する不適切な動作を含んでいるため、好ましくない動作であると思われる。

一方、「落とし箸」は箸を落とすことであるが、これは意図的な動作ではなく、非意図的な動作の結果である。この嫌い箸は例外的であり、あらゆる動作場面で起こりうる嫌い箸であり、前述した主要な動作場面においても生じる。

2) 本来の用途以外の使用の嫌い箸

箸の本来的な用途は、(必要な場合は) 食物を変形し (alter)、食物をつかみ (take)、口に入れる (put) ことである。これらから外れる箸の使い方は適切でないと考えられる。「寄せ箸」は箸で器を引き寄せる場合、「指し箸」は箸で人を指す場合の嫌い箸である。これらは、手の代わりに、手の延長として箸が使われている。一方、「叩き箸」は箸で器を叩いて音を出す場合、「せせり箸」は爪楊枝の代わりに箸を使う場合の嫌い箸である。これらは、他の道具の代用として箸が使われている。いずれの場合も、箸が道具として適切に使われていない道具使用の逸脱があり、望ましくない動作であるとされる。

6. おわりに

(1) 嫌い箸以外の食事マナー

本稿では食事マナーを考えるにあたって、嫌い箸を対象として動作の観点から検討を行ってきた。嫌い箸は箸を使う際の食事マナーであるが、箸を用いて食事を行う状況におけるすべてのマナーが嫌い箸に含まれているわけではない。嫌い箸に含まれないような食事マナーもある。ここではそのことを指摘しておきたい。

箸で弁当を食べる行為を観察した研究において、2種類の代表的なマイクロスリップが見い出された²⁹⁾。一つは、すでに前章で述べた、食物に箸をつけるときの動作推移の嫌い箸 (迷い箸、空箸、移り箸) である。もう一つは、食物を口に入れる時に、一瞬躊躇した後、続行するタイプのマイクロスリップである。後者のマイクロスリップは、話している時、もしくは咀嚼

している時に口に食物を運ぶタイミングをずらすために生じたものである。このマイクロスリップは食卓マナーとして望ましくない動作とみなされるが、嫌い箸として呼称されることはない。

嫌い箸は一般に「〇〇箸」というように簡略化された形で表現される。そのことは一般に呼びやすく親しみやすいのであるが、逆に「〇〇箸」というような簡単な名称で呼べないようなものは嫌い箸に含まれないことになる。したがって、箸を使う際の食事マナー全般を考えるのであれば、嫌い箸以外のものにも広く眼を向けていく必要があるだろう。

(2) 今後の展望

本稿で取り上げた基本的動作場面は、弁当を食べるという食事での分析の結果得られた動作系列を元にしたものであった。大皿の料理や鍋を食べるなどの場合は、取り皿を介したものとなるため、動作系列は当然異なってくるであろう。また、現在の食卓では、箸だけではなく、フォークやスプーンなど異なる食具が使われることも多い。さらに、今回の嫌い箸についての検討は、実際の食事場面を観察して得た嫌い箸の事例を検討したものではない。したがって、今後は、様々な状況における食卓における食事場面の詳細な観察を行い、実際にどういう種類の動作がどのように行われているかを明らかにした上で、食事マナーとの関係を明らかにしていくことが望まれる。

本稿で行った嫌い箸の検討から、多くの嫌い箸が動作の観点から捉えられることが示されたが、すべての嫌い箸にあてはまるものではなかった。渡し箸や立て箸などのように、動作そのものではなく、文化や宗教に関連する嫌い箸もあった。

Wang は箸に関するマナーを、3つのカテゴリに分類できると述べている³⁹⁾。1つ目は、箸文化圏に限定されない異文化的なもので、食事に相応しくない行動を避け、他者に不快感を与えないためのものである。2つ目は、箸に限定されたもので、適切に箸を扱って食物を口に運ぶためのものである。3つ目は、文化的、宗教的に関連するものである。Wang のあげた1つ目と2つ目については、動作の観点から扱うことができると思われるが、3つ目の文化的、宗教的なものは動作の観点から扱えない可能性がある。こうした本稿のアプローチの限界も考慮した上で、今後の研究を進めていかなければならないだろう。

引用文献

1. 日本スポーツ振興センター．平成22年度児童生徒の食事状況等調査報告書【食生活実態調査編】．(2011)．Available at: http://www.jpnnsport.go.jp/anzen/school_lunch//tabid/1490/Default.aspx
2. 安田直子，渡辺豊子，藤本千鶴，竹村利華，高木聡子．大阪府内の女子大生親子世代間における食事マナーと社会マナーの現状と意識．日本家政学会誌 **59**, 411-420 (2008)．
3. 岡田瑞穂．女子短大生のマナー意識について (1)．仁愛女子短期大学研究紀要 **34**, 1-8 (2002)．
4. 奥田和子．現代若者における食事マナーの意識と変容：甲南女子大生の調査報告から．甲南女子大学研究紀要 **23**, 183-199 (1986)．

5. 井上忠司. 食事作法の文化心理 講座 食の文化 5 食の情報化 (井上忠司) 315-333 (味の素食の文化センター, 1999).
6. 一色八郎. 箸の文化史. (御茶の水書房, 1990).
7. 石毛直道. 食事作法と食事様式 講座 食の文化 5 食の情報化 (井上忠司) 398-413 (味の素食の文化センター, 1999).
8. 黒須正明. 人工物進化学から考える意味性と審美性一箸を例として. 放送大学研究年報 **33**, 97-107 (2015).
9. 熊倉功夫. 日本の食事作法 講座 食の文化 5 食の情報化 (井上忠司) 366-383 (味の素食の文化センター, 1999).
10. 村上紀子. 現代人の食事マナー観 講座 食の文化 5 食の情報化 (井上忠司) 384-397 (味の素食の文化センター, 1999).
11. 本田總一郎. 箸の本. (柴田書店, 1978).
12. 勝田春子. 食文化における箸についての一考察: わが国における箸の変遷 (第1報) (弥生時代~鎌倉時代). 研究紀要 **20**, 205-215 (1989).
13. 高尾こいし. 家政学よりみた江戸時代 (九). 生活科学論叢 **9**, 1-14 (1976).
14. 文部科学省. 食に関する指導の手引- 第1次改訂版- (平成22年3月). (2010). Available at: http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm.
15. 向井由紀子, 橋本慶子. 箸. (法政大学出版局, 2001).
16. 金泰虎. 日韓の食事作法: 作法の相違とその作法形成の原因を中心に. 言語と文化 **11**, 99-116 (2007).
17. 山口昌伴. 食の道具たち (1) 食べる道具・考. 食の科学 **50-57** (2001).
18. 熊倉功夫. 食卓生活史の調査と分析: 食卓生活史の質的分析 (その2) 一食べものと食べかた一. 国立民族学博物館研究報告別冊 **16**, 99-119 (1991).
19. 勝田春子. 「日常食からみた箸の意識」についての調査 (第1報): 東京都練馬区立小竹小学校児童および保護者. 文化女子大学紀要. 服装学・生活造形学研究 **29**, 1-10 (1998).
20. 田島真理子, 橋口尚宝, 大富あき子. 食事規範の伝承に関する研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育学編 **57**, 87-95 (2006).
21. 加藤和子, 橋内範子, 大島悦津子. 女子大生における箸に対する意識調査. 東京家政大学博物館紀要 **9**, 33-41 (2003).
22. 勝田春子. 「日常食からみた箸の意識」についての調査 (第2報): 東京都練馬区立小竹小学校児童および保護者. 文化女子大学紀要. 服装学・生活造形学研究 **31**, 25-36 (2000).
23. 荒井三津子, 清水千晶, 中矢雅明. 「現代の食事作法 - 家庭の教育と新しい方向性 -」. 北海道文教大学研究紀要 **31**, 43-55 (2007).
24. 細川裕子, 福田綾子. 短大生の食事マナーに対する意識と実態 一食教育における一考察として一. 目白大学短期大学部研究紀要 **50**, 31-42 (2014).
25. 内閣府食育推進室. 食事に関する習慣と規範意識に関する調査報告書. (2010).
26. 本田總一郎. 箸の本一箸の“あげ下ろし”から面白ウンチク話まで. (日本実業出版社, 1985).
27. 小倉朋子. グルメ以前の食事作法の常識. (講談社, 2006).
28. 奥田和子. 箸の作法. (同時代社, 2013).
29. 廣瀬直哉. マイクロスリップにおける行為の非流暢性と修復パターン. 生態心理学研究 **6**, 77-78 (2013).
30. 廣瀬直哉. マイクロスリップとアクションスリップ: 記述とタイプ. 生態心理学研究 **9**, 61-64 (2016).
31. 廣瀬直哉. マイクロスリップに関する研究の動向. 生態心理学研究 **8**, 49-61 (2015).
32. Reed, E. S., Palmer, C. F. & Schoenherr, D. On the nature and significance of microslips in everyday

- activities. *J. Ecol. Psychol.* **4**, 51-66 (2009).
33. 廣瀬直哉．食事場面における行為の淀みの時系列変化．日本心理学会第75回大会発表論文集 966 (2011).
 34. 谷田貝公昭，高橋弥生．幼児の基本的な生活習慣 第3版．(一藝社，2016).
 35. 坂田由紀子．箸の持ち方とその機能性およびその要因について：女子学生について．日本家政学会誌 **41**, 637-645 (1990).
 36. 山内知子，小出あつみ，山本淳子，大羽和子．食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー．日本調理科学会誌 **43**, 260-264 (2010).
 37. 奥田和子，森田由紀，森本裕子．箸の持ち方と機能性．食生活研究 **21**, 44-49 (2001).
 38. 上原正子，大場和美，加藤象二郎．箸の持ち方・使い方の発達段階別の差異．瀬木学園紀要 **8**, 7-15 (2014).
 39. Wang, Q. E. *Chopsticks: A cultural and culinary history*. (Cambridge University Press, 2015).